

## 美術・建築

2011年の美術界や建築界は、東日本大震災や東京電力福島第一原発事故で大きく揺れた。アートや建築は「非常時」に何ができるのか。そのあり方自体を根源的に問い直す動きが広がった1年だった。

### 存在意義

震災後、海外から借りた美術作品を目玉に据えた企画展が中止や延期、内容変更に追い込まれた。海外の美術関係者が日本への作品貸し出しを渋ったためだ。

原発事故に対する懸念は国内にも広がった。東京・目黒区美術館の「原発を視る1945-1970」展が中止に。深刻な影響を受けた人々の心情に配慮しての決定だが、こんな時期だからこそ聞くべきだとの声もあり、美術館の存在意義を問う契機となった。

一方、アトドで原発問題に切り込む動きもあった。若手美術家グループが、東京・渋谷駅構内に飾られている岡本太郎の壁画「明日の神話」に原発事故の絵を付け加え、書類送検された。社会における表現行為の意味が問われる事件だった。

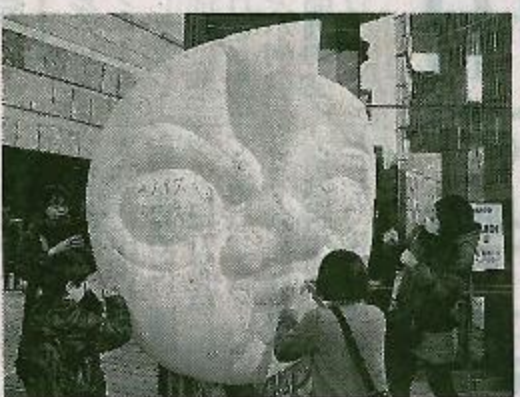
## 「非常時」表現行為問い直す

被災地では多くの美術館や博物館が壊滅的な打撃を受けた。被災した美術品の救援活動が行われ、チャリティオークションなど支援活動も盛んだった。

### エネルギー

岡本太郎の生誕100年記念イベントが各地でめじる押しだった。若い世代を中心に盛り上がり、伝統や既成概念に体当たりした芸術家のエネルギーの根源を探った。

3年に1度の現代美術の国際展「ヨコハマトリエンナーレ2011」が横浜美術館などで開かれた。運営の中心だった国際交流基金が事業仕分けで主催者から外れ、4回目の今回は横浜市が主体に。影響が懸念されたが、



岡本太郎さんの生誕100年を祝う音楽イベントの会場。2月、東京都内

## 佐藤忠良さん死去

### 具象彫刻の第一人者

3カ月間の会期中、約33万人が訪れた。

### 「私」を超えて

建築界では震災後、「復興に向けて何ができるか」が大きなテーマに。伊東豊雄ら世界的に活躍する建築家5人が「帰心の会」を結成。坂茂は阪神・淡路大震災の経験を踏まえた避難所をつくる取り組みを進めた。独創的な建築にこだわってきた建築家が「私」を超えてできることを模索する動きが広がった。

折しも、世界建築会議「UIA（国際建築家連合）2011東京大会」が日本で初めて開催。震災経験も踏まえ、21世紀半ばに目指すべき建築や都市のあり方を探った。

写真絵画の「復権」が話題に。日本初の写真絵画専門美術館「ホキ美術館」が多くの来場者呼び、若手作家の台頭も目立った。

前衛芸術家の草間弥生の巡回展が欧米各地を回り、存在感を示した。神戸市内では隔年開催

計約3万4千人。

具象彫刻の第一人者だった佐藤忠良のほか、前衛芸術家集団「ネオ・タダ」の吉村益信、「具象美術協会」のメンバーで宝塚市を拠点に活動したユーモラスな抽象絵画の元永定正、前兵庫県立美術館館長で美術評論家の中原佑介、瀬木慎一らが、この世を去った。

（敬称略）

文化  
BUNKA

